

塩尻地方における私塾・寺子屋考

池田 源 宏
Motohiro IKEDA

1、はじめに

私塾・寺子屋は、藩校及び明治初年学制直前に短期に存在した郷学校とともに、わが国の近代学校教育発展の素地になっていると考えられている。また一方、地方でも地域（例えば江戸時代からの旧村）により、その教育的風土は明治以降も微妙な違いを示しており、その違いにはその地域に存在した私塾・寺子屋及び師匠の存在が、大きな要因の一つとなっているものと思われる。

しかし私塾・寺子屋については、その実態を把握するための直接資料に極めて乏しく、例えば明治16年と19年に報告された東筑摩郡の浅井冽の調査資料⁽¹⁾にしても、その後の市町村史等の史料発掘、精査等により、修正すべき点がかなりあり、史料そのものの考証、精査が進められなければ正確な実態はつかめないのが実情である。

本稿は塩尻市誌編纂の作業過程での調査資料をもとに既存の資料を精査しつつ、できる限り誤謬を正し、現時点でのこの地方の資料としてより正しいと思われるものにまとめてみたものである。もとより本文に掲載した資料は今後さらに厳密な考証を要し、修正されるべき余地のあることはいうまでもない。

2、塩尻地方の地理的・歴史的背景

塩尻市域は旧幕府領、松本藩、高島藩、高遠藩の4つの支配から成る複雑な構造をもった地域であった。特に幕末（慶応4年から明治元年）には、これらの支配のもと33か村から成り立っていた。

また塩尻は早くから交通上の要衝であった。木曾から諏訪に通ずる中山道は、さらに北善光寺道、東に甲州道中、南は伊那街道へと繋がっている。それらの街道筋には本山、洗馬、塩尻、郷原の各宿があり、さらに村井宿⁽²⁾、小野宿が隣接している。これらの宿場町を中心に、当時の庶民は江戸や京を中心とする文物と接する機縁が生じ、有形無形の影響を受けた。江戸末期になると、自給自足をたてまえた自然経済がなおかなり支配的ではあるものの、貨幣経済、商品経済が一段と進むにつれ、人や物の交流がさらに活発になり、それが都邑地ばかりではなく、街道筋からさらに周辺の郷村山間地へと波及していった。

一方村々は高札・法度・お触書などにより、また最末端の治安・行政単位である五人組制度により支配され、若者組にしても、従来の慣行から掟書に基づいて行動することが要求されるようになった。

このような経済社会の変化に伴って、必然的に庶民はその営む生活に文字の読み書きやそろばん（計数）が必須不可欠となってくる。加えて塩尻は前述のように主要な街道が縦断し、文物・人の交流が他の地域より比較的に頻繁だったので、特に幕末維新期には、激動する時代の変化をよりいっそう肌に強く感じ、受け身的な読書算ばかりではなく、来たるべき未知の時代に向けての、新しいもの、新しい世界を知ろうとする、好奇と期待も高かったものと思われる。当時の庶民にとって、これらの要求を満たしてくれる身近な教育の場が寺子屋・私塾であり、また師匠たちであった。

3、私塾・寺子屋の開業と普及について

家塾も私塾も師匠の学派・学統で統制されていた点では共通の性格をもっていたが、私塾は民間の知識人が任意に設けた施設であり、幕末に開設された私塾のうち小規模で不完全なものは、寺子屋と区別しがたいものが多い。塩尻地方の場合も同様な傾向をもつので、ここでは「私塾・寺子屋」として扱うこととする。幕末維新期にかけて開業されていたものの中には、私塾と思われるものも散見できるが、規模・内容などに厳密な直接史料を欠いているので、これらは明確に区分することはできない。

江戸時代から明治初期にかけて塩尻に開業されていた私塾・寺子屋は表1に示したとおりである。ここには明治21年まで旧広丘村に含まれていた村井町村・小屋村、それに昭和35年まで片丘村に含まれていた北内田村（現松本市内田区）の私塾・寺子屋（以下寺子屋とのみいう）も含めてある。いうまでもなく寺子屋は師匠をたよって自由に学ぶことができたから、他村にある寺子屋へ登山することもできたとし、また遠方の寺子屋に登山する寺子もいた。例えば松本の私塾「珠算舎入門規則言証」⁽³⁾には、塩尻市大門の小野嘉一郎の名前が見られるし、広丘堅石の関谷政一の筆塚には、塩尻の三西条出身の門弟のいたことが碑文に記されているなどである。

表1 塩尻の私塾・寺子屋

備考欄には下記のような原拠文献を示した

★印は『東筑摩郡郷土資料編纂会文化部中間報告(第46集)』

△印は『塩尻町誌』(昭和12年)

○印は『松本平手習師匠』(飯沼源次郎編・大正12年)

◎印は『長野県教育史』第8巻

<塩尻>

名称	所在地	開業年	廃業年	師匠数	寺子数		調査年	身分	師匠名	備考
					男	女				
柳河堂	大小屋村	安政6	明治5	1	175	15	明治2	農	荻上一夫	◎△★ 顕彰碑(明治27年)
	上西条村	天保13	明治6	1	104	13	慶応2	僧侶	摺木栄性	◎○△★ 碑(明治21年)
王泉堂	同	不詳	不詳	不詳	340(男)		不詳	農	小松平兵衛	△★ 八算見一、相場割
	長畝村	弘化2	明治6	1	30	5	明治5	農	佐久間秀周	◎○△★ 顕彰碑(明治13年)
	塩尻町村	明治4	明治6	1	28		明治6	僧侶	旭興琳	◎△★
	同	安政5	明治元	1(女)	13	52	万延元	農	上條キヨ	◎△★
	同	不詳	不詳	不詳	不詳		不詳	神官	塩川左馬治	○△★
	同	安政5	明治元	1	13	52	不詳	農	上條與五右衛門	○△★ 恩碑(明治18)
								農	上條與十郎	○△ 與五右衛門の嫡
	同	安政年間	明治5	不詳	不詳		不詳	農	川窪十五郎	○△★ 曆法・算学
	下西条村	不詳	不詳	不詳	不詳		不詳	神官	関頼央	○△★ 碑
	同	慶応年間	不詳	不詳	不詳		不詳	農	佐倉仁十郎	○△★
	柿沢村	弘化2	明治6	1	40	5	明治5	農	市ノ瀬倫十郎	◎△★ ◎には一ノ瀬とある
								農	市ノ瀬林右衛門	○△ 倫十郎の父
	棧敷村	文化7	嘉永3	1	154	16	万延元	農	吉江吉郎	◎△★ △には寺子数男 156女19とある
	同	慶応年間	不詳	不詳	不詳		不詳	農	野村又助	○△★ 手習と剣術
	同	不詳	不詳	不詳	不詳		不詳	農	吉江善左衛門	○△
	金井村	嘉永4	明治元	1	20		文久元	農	小宮山養鹿	◎○△★
	同	嘉永年間	明治5	1	不詳		不詳	農	青木嘉兵衛	○★
	大門村	不詳	不詳	不詳	不詳		不詳	農	米久保七左衛門	○

<片丘>

備考欄中の◎印は『片丘村誌』(昭和60年)による

	南内田村	不詳	明治年間	1	不詳		不詳	医者	吉田清右衛門	○★◎ 吉田は養子先の姓、 のち村上姓、筆塚
	同	不詳	不詳	不詳	不詳		不詳	農	村上與右衛門	○◎ 清右衛門の嫡
	同	嘉永3	明治6	1	60	10	慶応2	農	村上與八	◎○★◎ 與右衛門の嫡
	同	天保10	明治5	1	20		文久元	農	村上孫左衛門	◎★◎
	同	安政年間	明治6	1	不詳		不詳	農	村上書左衛門	○★◎ 領徳碑・第6番 小校・内田学校教師
	同	明治初年	不詳	1	30		不詳	農	米久保市太郎	○★◎
	同	文久年間	明治初年	1	30		不詳	農	百瀬長兵衛	★◎
	同	慶応年間	明治初年	1	不詳		不詳	神官	唐沢新吾	★◎ ★では唐沢新吉

名称	所在地	開業年	廃業年	師匠数	寺子数 男 女	調査年	身分	師匠名	備考
	北熊井村	寛政 9	天保 2	1	120 15	文政 3	農	赤羽秀治	◎★㊦ 旧姓小宮多
	同	天保 2	文久元	1	100 10	嘉永 4	農	小松長左衛門	◎○★㊦
	同	安政元	明治 6	1	70 7	慶応元	神官	塩川内蔵之助	◎○★㊦ 別名吉令
	同	不詳	明治初年	不詳	500	不詳	神官	塩川吉連	○★㊦ 吉令の嫡・別名内蔵之助、維新期小学校教師 報恩の碑（明治35年）
	同	明治初年	不詳	1(女)	不詳	不詳	農	小松政子	○㊦ 手習・裁縫・茶香・謡曲・星曆などを教授
	同	文久年間	明治初年	1	不詳	不詳	農	赤羽安之丞	○★㊦ 別名安之助
	同	嘉永年間	不詳	不詳	不詳	不詳	農	赤羽逸八	○★㊦
	同	不詳	安永年間	1	不詳	不詳	農	大和治平	★㊦ ㊦では治兵衛
	同	文久年間	明治初年	1	40	不詳	農	島崎富左衛門	★㊦ 富右衛門は誤り
	同	嘉永年間	明治初年	1	不詳	不詳	僧侶	菅原寿敏	★㊦ 常光寺住職のち北熊井学校教師
	南熊井村	文政12	安政 5	1	80 12	安政元	農	酒井彦右衛門	◎○★㊦
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	神官	塩川丹後	○★㊦
	同	明治初年	不詳	不詳	不詳	不詳	僧侶	栄禅	★㊦ 松林寺住職のち南熊井学校教師
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	僧侶	小倉仙海	
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	大和代右衛門	㊦
	中挟村	安政 5	慶応 3	1	40 5	慶応元	農	中村七左衛門	◎○★㊦
	北内田村	嘉永 2	明治 7	1	100 10	文久 3	神官	唐沢豊後	◎★㊦ 碑
	同	天保元	安政 2	1	120 12	弘化元	僧侶	空性（慈恵）	◎○★㊦ 常楽寺住職 碑
	同	嘉永 5	明治 5	1	40(男女)	不詳	神官	唐沢主守	○★㊦ 明善学校教師兼学校世話役 領徳碑
	同	不詳	不詳	1	不詳	不詳	僧侶	白石	○★㊦ 桃昌寺住職
	同	天保年間	不詳	不詳	不詳	不詳	農	横山孫治右衛門	★㊦ ★では孫右衛門

〈広丘〉

	吉田村	文化 2	天保 4	1	40 5	文政11	神官	林豊前	◎○★ 林土佐ともいう
	同	嘉永 2	明治 5	1	32 8	明治元	神官	林宅馬	◎★ 土佐・宅馬の筆塚 (明治37年)
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	手塚晋吾	○ 大正 2 年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	上條源作	○ 明治 2 年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	赤津綱右衛門	○碑(未確認) 文政 5 年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	御子柴真澄	○ 大正 4 年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	太田清七郎	○ 明治初年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	百瀬三左衛門	○ 安永年間存命

名称	所在地	開業年	廃業年	師匠数	寺子数		調査年	身分	師匠名	備考
					男	女				
郷福寺	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	上條源五郎	○ 明治4年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	赤津茂八郎	○ 十露盤師匠明治14年没
	同	不詳	明治初	不詳	不詳	不詳	不詳	農	小澤清助	○ ○に「小学に奉ず」とあり
	野村	天保元	明治3	2	25	5	天保10	農	野村吉左衛門	◎○★
	同	弘化2	嘉永5	1	10	3	嘉永元	農	野村仁十郎	◎★
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	野村與源次	○ 野村仁十郎の祖父
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	三澤平野右衛門	○ 書道謡曲
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	鈴木長十	○
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	高木與五六	○ 算法 明治40年没
	堅石村	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	関谷政一	○ 筆塚(弘化2)
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	百瀬太左衛門	○ 維新名 村治
	郷原町村	安政5	明治5	1	52	18	明治元	僧侶	白馬運喜	◎○★ ◎には運喜とあり
	高出村	文政10	天保13	1	15	2	天保5	農	大和安右衛門	◎★
	同	弘化3	慶応3	1	18	2	安政2	農	大和亮逸	◎○★
活堂 同	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	大和三郎右衛門	○ 安政元年没
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	永原政右衛門	○ 明治20年没
	村井町村	安政6	明治2	1	43	7	慶応3	医師	中島葵節	◎★
	同	嘉永年間	明治2	1	不詳	不詳	不詳	医師	中島秀貞	○★ 葵節嗣子 明治15年没 崇徳碑(未確認)
	同	文政7	天保9	1	60	10	天保3	農	蛭川郡三	◎○★
	同	嘉永年間	明治初	不詳	不詳	不詳	不詳	神官	永持越中	○★報徳碑(未確認)
	同	文政年間	天保年間	不詳	不詳	不詳	不詳	農	大和圓五郎	○★
	同	文化年間	文政年間	不詳	200(男女)	不詳	不詳	農	宮嶋新五右衛門	○★ 小屋村に寺子屋あり ★には宮島とあり
	小屋村	天保元	安政4	1	30	5	嘉永2	僧侶	常福寺住職 (氏名不詳)	◎★ ★には開業が天保9年とあり
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	嶋八郎右衛門	○恩碑(未確認) 天保5年没
同	同	弘化年間	嘉永年間	不詳	不詳	不詳	不詳	農	宮島仁左衛門	○★

<北小野>

備考欄中▲印は北小野地区誌(昭和62年)による

鼎光学舎	北小野村	文久2	明治2	1	20	10	明治2	農	古田清平	◎○★ 名称中鼎は○では 暫、▲では暫となっている
重斯学舎	同	嘉永元	明治元	1	130	20	嘉永3	農	辰野源三	◎★▲ 碑(明治22)
同	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	辰野源左衛門	源三の父
頼母学舎	同	天保元	明治2	2	160	40	天保3	神官	小野金吾	◎★▲ 表徳碑
同	同							神官	小野勇	★▲ 金吾の嫡 表徳碑

名称	所在地	開業年	廃業年	師匠数	寺子数 男 女	調査年	身分	師 匠 名	備 考
本神戸	同	宝永年間	文政年間	不詳	不詳	不詳	農	永田及左衛門	◎には開業が寛永、▲には正徳、★では宝永となっている。永田家では代々及左衛門と忠右衛門を名乗っているの、◎★にある「忠左衛門」はまちがいと思われる。
	同	不詳	慶応元	1	67 2	安政2	農	永田忠右衛門	
	同	不詳	慶応元	1	67 2	安政2	農	永田及左衛門	
	同	不詳	慶応元	1	67 2	安政2	農	永田及左衛門	
加根幸	同	文化3	文政6	1	46	文政元	農	神戸但馬	◎○★▲
	同	文化3	文政6	1	46	文政元	農	神戸大隅	
	同	文化3	文政6	1	46	文政元	農	神戸為宣	
加登屋	同	慶応2	明治元	1	12	慶応2	農	小野幸四郎	◎★▲ ▲には寺子中女20とあり
調富斎	同	慶応3	明治元	1	6	明治元	農	矢彦知光	◎★▲
	同	慶応3	明治元	1	6	明治元	農	米山秀彦	◎○★▲ ○では名称が潤富軒

〈宗賀〉

備考欄中◎印は宗賀村誌（昭和36年）による

	洗馬駅	文化8	安政3	1	25 5	安政2	修験	鈴木清光	◎○★◎ 筆塚（明治38）
							修験	鈴木嘯玄	◎ ◎には「清玄」、筆塚には「嘯玄」とある
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	奈良井半左衛門	◎
	同	嘉永元	慶応3	1	10 3	慶応2	農	原野造六	◎○★◎ ◎では「辰野」、○には「藏六」とあり
	床尾村	弘化2	明治元	1	20 5	文久3	農	上條伴逸	◎○★ ○には「針尾村出身」とあるが誤り
	同	文政年間	明治年間	不詳	不詳	不詳	神官	小林元齋	○★ 筆塚（明治22）
	本山駅	文政10	明治5	1	50 10	明治3	神官	林久命	◎○★◎ のち洗馬支校助教
	日出塩村	文政8	慶応2	1	5 3	慶応元	国学者	塩原興左衛門	◎○★◎ 筆塚（年号不詳）
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	僧侶	梵量大器	◎ 長泉院四世住職
	平出村	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	中野廣作	○

〈洗馬〉

釜井庵	本洗馬村	不詳	弘化2	1	30 8	天保14	不詳	新美清大夫	◎★ ★では清大夫
	同	弘化3	嘉永5	1	50 12	嘉永4	不詳	大脇正蔵	◎★ ◎印には「大協」とある
釜井庵	同	安政5	明治6	2	60 20	明治5	農	小林源吾	◎○★ ★では開業が安政2年
	同	安政5	明治6	2	100 16	明治3	農	大池観由	◎○★ 碑（明治23）のち小曾部学校教師
	同	嘉永3	明治6	1	43 9	慶応2	農	三村七平	◎★ のち思誠学校助教
	同	不詳	明治5	不詳	不詳	不詳	農	原新九郎	○★ のち学校世話役

名称	所在地	開業年	廃業年	師匠数	寺子数	調査年	身分	師匠名	備考
					男 女				
釜井庵 漁樵吟社 釜井庵	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	画家	古曳盤谷	★
	同	不詳	文政元	1	不詳	不詳	農	丹羽花遅	★ 碑（釜井庵内）
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	士	長尾無墨	維新後本村に滞在
	同	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	山本石斎	★
	下小曾 部村	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	新倉伴右衛門	○ ○によると文政年間から天保年間に開業。万延元年没。琴は伴右衛門の妻で、手習のほか琴、活花を教授。
	同	嘉永初	慶応2	不詳	不詳	不詳	農	新倉琴	○★
	上小曾 部村	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	農	南山氏右衛門	★
岡野塾	岩垂村	嘉永初	明治6	不詳	不詳	不詳	医師	岩垂柳塘	★
	同	不詳	明治5	不詳	不詳	不詳	農	岩垂平八郎	○★ ★では「岩平」
	同	嘉永年間	明治初	1	不詳	不詳	農	岩垂茂右門	★

この表1の備考欄には原拠文献を示し、諱のほか別名があり、そのため別人と誤記されて重複して掲載されているようなものについては、調査のうえ訂正してある。なお碑、顕彰碑、頌徳碑など、通称筆塚と呼ばれているもののうち、現存が未確認のものはその旨を記してある。

この表1をもとに私塾・寺子屋開業年代、開業数及び師匠数を地区別にまとめたものが次の表2である。

表2 私塾・寺子屋開業年代と数及び師匠数

年代等	地 区	塩 尻	北小野	宗 賀	洗 馬	片 丘	広 丘	合 計
宝 永 (1704～1711)			1					1
正 徳 (1711～1716)								
享 保 (1716～1736)								
元 文 (1736～1741)								
寛 保 (1741～1744)								
延 享 (1744～1748)								
寛 延 (1748～1751)								
宝 暦 (1751～1764)								
明 和 (1764～1772)						(1)		1
安 永 (1772～1781)						(1)		1
天 明 (1781～1789)								
寛 政 (1789～1801)						1		1
享 和 (1801～1804)								
文 化 (1804～1818)		1	1	3			2	7
文 政 (1818～1830)				1	(1)	1	3	6
天 保 (1830～1844)		1	1			4	2	8
弘 化 (1844～1848)		2		1	1(1)		3	8
嘉 永 (1848～1854)		2	1	1	4	4	1	13
安 政 (1854～1860)		4			2	3	2	11
万 延 (1860～1861)								
文 久 (1861～1864)			1			3		4
元 治 (1864～1865)								
慶 応 (1865～1868)		2	2(1)			1		6
明 治 (1868～1913)		1			(2)	2(1)	(1)	7
寺 子 屋 開 業 数		13	7(1)	6	7(4)	19(3)	13(1)	74
開業廃業とも年代不詳のもの		5	0	3	4	3	16	31
寺 子 屋 数		18	8	9	15	25	30	105
師 匠 数		20	15	10	16	29	33	123

1. 親子・孫というように、代々引き継いで開業していたと思われるものは、一つの寺子屋とみなし、算定した。

2. () 内の数字は廃業年代のみ明らかなもので外数。

これによると、江戸中期から明治初期にかけて、塩尻市域33か村に開業されていたと思われる寺子屋は105(代々引き継いで開業していたものは、師匠が代っても一つの寺子屋とみなした)、師匠数は120人余にのぼる。その規模は調査時点で、寺子数が10人足らずの小規模のものから、数百人前後の大規模のものまであり、きわめて規模の大小に差がある。

塩尻で寺子屋が最も盛んに開業された時期は、文化(1804年)から安政(1860年)末年頃で、ほぼこの50年間に約半数の53の寺子屋が開業されている。開業年代不詳のものも31あるので、105の寺子屋のうち、53以上はこの年代に設立されていると思われる。

このような塩尻の寺子屋開業傾向で特異な点は、文化から安政にかけて急増をたどる傾向は全国的にも、長野県の傾向とも一致しているが、安政以降慶応に至るまで、時代を経るごとに普及の勢いを強めていく全国的傾向⁽⁴⁾と異なり、この時期に10の寺子屋しか開業されておらず、開業年代不詳のものを考慮にいれても、急増傾向がみられないことである。

なお宗賀においては表1に示した寺子屋のほかに新福寺、万福寺、長久寺等の住職が寺子の教育をしていたといわれている⁽⁵⁾が、火災による資料焼失ではっきりしたことはわからない。

開業、廃業の年代とも明らかな寺子屋のうち、市域で最も古いものは北小野村の永田及左衛門の寺子屋で、宝永年間(1704-11)であるが、ただし正確な年代は特定できない。少なくとも江戸中期初頭には開業されていたようである。しかもこの永田家の寺子屋は文政年間まで続いていたので、4代1世紀以上も開業されており、開業年代の古さ、開業期間の長さとも、塩尻市域では出色である。

このほか2代以上にわたって開業が父子孫というように継続されたものは塩尻では上條與五右衛門・與十郎、市ノ瀬林右衛門・倫十郎の2件、北小野では先の永田家を初め、小野金吾・勇、神戸但馬・大隅・為宣、辰野源左衛門・源三の4件、宗賀の鈴木清光・嘯玄、片丘の吉田清右衛門・村上與右衛門・與八、塩川吉令・吉連、栄禅・仙海の3件、広丘の林豊前・宅馬、野村與源次・仁十郎、中島養節・秀貞の3件などである。以上の13の寺子屋は2代な

いし4代にわたって開業されていた。

また明治初頭に開業されていた寺子屋は、江戸末期から明治初年に開業されたものも含め表3のように42である。廃業年不詳のものがかなりの数にのぼっているので、実際にはこの数字より多かったと思われる。

これらの寺子屋の師匠の中には、明治5年の学制頒布以降、村々の小学校設立に際して教師として、また学校世話役などとして直接関与したものがかなりいる。

表3 寺子屋開業数
(明治初頭)

地 区	開業数
塩 尻	10
北小野	5
宗 賀	3
洗 馬	7
片 丘	11
広 丘	6
計	42

4、私塾・寺子屋師匠について

表4でも明らかなように寺子屋師匠の身分・職業で最も多いのは農民であり、79人というのは、全体の64.2%を占めていることになる。つづいて神官、僧侶が多い。宗賀地区の寺の住職の中には寺子屋師匠をしていたものが数名ほどいたようであるから、僧侶の師匠数は表の数字よりもっと多かった。

表4 私塾・寺子屋師匠の身分職業

地区	身分職業	農	僧侶	神官	修験	医者	士	その他	不詳	計
塩尻		16	2	2						20
北小野		12		2				1		15
宗賀		4	1	2	2			1		10
洗馬		10				1	1	1	3	16
片丘		17	5	6		1				29
広丘		20	2	3		2			6	33
計		79	10	15	2	4	1	3	9	123

このような傾向は県内の傾向とも重なるが、特に伊那・筑摩・安曇三郡では農民師匠の割合が高かったとされているように、塩尻市域の場合も例外ではない。このことはこの地帯に読み書きのできる農民の識字層が厚かったともいえる。その中には庄屋(名主)、長百姓、組頭のような村役人をつとめた人が多く、また分家によって独立した農民のうち読み書きのできる者が開業している場合もある。

明治16年の浅井湧の寺子屋調査⁽⁶⁾は、当時寺子屋で素読用の初歩的教科書の一つであった実語教を教える場合、寺子屋師匠はそれを読むだけで「其訓義ノ如キハ教ユルコトナシ、是レ十中八九ハ教ユルコトヲ得サル者ナリ」と報告している。浅井の目には「十中八九」そう思えたのか、事実そうであったのかは疑問の残るところであるが、この程度の師匠の多かったこともまた事実であろう。

農民出身の師匠でも、例えば塩尻村の上條與五右衛門は「出で、京都に経伝を修め兼て皇朝の古学古典を講ぜり」とあるように京都に遊学しているし、上西條村の小松平兵衛は江戸で算学を修め、八算見一や相場割を門生に教え、また小曾部村の新倉伴右衛門も江戸で程朱学を修めているなど、郷里を遠く離れ当時としては高度な学問を修めている師匠も見うけられる。⁽⁷⁾

師匠のほとんどは男性であるが、塩尻には3人の女性師匠がいた。小曾部村の新倉琴は伴右衛門の妻であるが、嘉永から慶応にかけ、夫亡きあと師匠をつとめた。「和漢の学を修め歴史に明らかなり、琴棋を嗜み殊に琴瑟の奥妙を極め、詠歌を能して手跡又尋常にあらず」⁽⁸⁾といわれ、明治期の村の有能な人材を育てたとされる。

安政5年から明治元年まで寺子屋を開いていた塩尻町村の上條キヨは、男女の寺子を教育しているが詳細は不明である。

北熊井村の小松政子は明治初年に開業していた。「其教へを受けて習字、裁縫、茶香、謡曲、星曆、句読に名を得たるも少なからず」⁽⁹⁾といわれている。

この頃の寺子屋の様子を伝える直接資料は極めて少ないが、小松玉六の明治元年、数え年9歳時に関する記録、『玉六の一生とその回顧』⁽¹⁰⁾には次のように述べられている。

寺子屋の稽古は朝より夕方まで与へられし手本(習字本)により 字形を草紙に書き 其の意義読方等をも覚ゆるを目的とす 当時今日の如き時計なるものなかりしかば 線香を点火し 1本終れば一休み休憩 暫らく監督者撃析等によりて着席をなし自習すべきを令す 但し昼食後の休みは昼休みと称して1時間以上の休みなりし故に この休みに於ては鬼事や其他の遊をなし 春は田圃へ行きて摘草等をなして遊ぶ者もありし……(中略)……手習師匠の報酬は定まれるものなく 盆暮に僅少の銭と餅位を贈りしのみ 師匠たる人も決して報酬には眼をくれず 唯師匠様と敬称して尊敬せらるゝを以て満足し指導の任に当れるものなり

さらに小松玉六は同『回顧』の中で、朝寺子屋へ行く前に、近所にいた大熊杏齋という医家より、経書の素読の教授を受けたと述べている。このように、当時は寺子屋や私塾を開業せずに、近在の子どもを教授した師匠もかなりいたと思われる。

5、筆塚について

今日と違い、寺子はずきたい教師(師匠)を慕って入門しているわけであるから、師匠からの人格的影響は大であり、下山後も人間的な繋がり続くことになる。師匠もまた村の風教の中心たらしめたので、門弟は生涯報恩尊敬の念を抱く。その記しを師匠没後筆塚、報徳碑、頌徳碑、顕彰碑という形で後世に残している。これらのものを筆塚とか筆子塚と呼んでいるが、塩尻で確認できたものは次の18基である。これ以外にも未確認のものが数基はあると推定できる。

ほとんどの筆塚は主として門弟によって明治になってから建立されたものであり、江戸期に建立されたことが判明しているのは4基である。

この中で際立って古い筆塚は片丘の吉田清右衛門(正眼)のもので、明和九(1772)年に無量寺(片丘南内田)入口に1基、隣接墓地に1基と、同じ年に2基建立されている。「五輪塔陰刻」には「吉田氏名舒政通称清右衛門墓門弟子」と銘文があり、他方の碑陰には「門弟五百余人 吉田清右衛門事」と刻まれている。北小野の永田及左衛門を除き、この地方に寺子屋のほとんどなかった江戸中期にこの郷村に五百余人の門弟をもった師匠がいたというこ

表5 塩尻市域筆塚一覧

地 区	師 匠 名	記銘文（主なもののみ）	所 在 地	年 号
塩 尻	佐久間秀周	佐久間秀周碑	長畝	明治13年
	荻上一夫	荻上一夫君之碑銘	大小屋	明治27年
	摺木栄性	書字教授功名碑	上西条	明治21年
北小野	辰野源三	榎齋辰野先生の碑	大出	明治28年
	小野金吾	惇正鶴翁二先生表徳碑	宮前	不詳
	小野 勇			
宗 賀	小林元齋	筆塚 小林元齋先生神霊	床尾	明治22年
	鈴木清光	大楽院 鈴木清光	洗馬	明治38年
	鈴木嘯玄	筆塚 大教山 鈴木嘯玄	日出塩	なし
洗 馬	不詳	筆塚 正進言	日出塩	なし
	塩原與左衛門	筆塚 塩原與左衛門	日出塩	なし
		筆塚 正孝翁筆塚		
片 丘	大池観由	大池鶴道君……	芦ノ田	明治23年
	不詳	筆塚 耕軒先師筆塚	下小曾部	天保10年
	丹羽花逕	花逕丹羽先生之碑	元町	不明
広 丘	吉田清右衛門（正眼）	五輪塔陰刻	南内田	明和9年
	〃	普照正眼法師靈位	〃	〃
	塩川吉連（内蔵之助）	報恩の碑	北熊井	明治35年
唐澤吉満（主守）	唐澤吉満（主守）	唐澤吉満翁碑	内田	明治39年
	林土佐（豊前）	筆塚 林土佐先生	吉田	明治37年
	林宅馬	筆塚 林宅馬先生	堅石	弘化2年
	関谷政一	筆塚		

とは、比較的山間部の片丘にその後多くの寺子屋師匠が出現していることと関連があると思われる。『松本平手習師匠』(11)によると「幼にして書を能くす、出でて京都に遊び経史を講じ特に本草を研究に、帰るに及び診を乞ひ学を求むる者日々踵を接せり、是に於て始めて医門を開き兼て教訓の室を設けたり、医術大に行はれ隣保漸く文字あり……」と記されている。周辺に寺子屋のなかった時代だから当然隣村地域からも寺子が通って来たにちがいない。

6、おわりに

寺子屋に関する研究にとって重要なことは、年々喪失されつつある直接史料の収集発掘であることは論をまたない。本稿では触れなかったが、例えば村域の庶民の教育要求や教育内容を知るうえにも、手本の収集分析は重要である。塩尻市域においてもかなりのものが収集されたが、出所が偏っており、地域地域によって庶民の求めた要求度、要求内容に違いがあったと思われるが、教育風土の形成という観点からの研究にしても、それぞれの地域からの満遍ない収集が必要となることが今後に残された課題である。

注

- (1) 「東筑摩郡私塾寺子屋取調べ」、『長野県教育史』第八巻・史料157 長野県教育史刊行会 昭和48年
- (2) 明治22年までは、現塩尻市の広丘村に属す。
- (3) 前出『長野県教育史』第八巻・史料147
- (4) 石川謙『日本庶民教育史』刀江書院 昭和4年 386ページ
- (5) 『宗賀村誌』参照
- (6) 前出『長野県教育史』第八巻・史料157
- (7) 飯沼源次郎編『松本平手習師匠』私家版 大正13年
- (8) 同前208ページ
- (9) 同前78ページ
- (10) 小松玉六『玉六の一生とその回顧』私家版 昭和8年 2-3ページ
- (11) 前出『松本平手習師匠』18ページ